國學院大學学術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学．教育思想, NDC8:161.3, 宗教学．宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

セッション3

発題：Thomas Jolyon

（トーマス・ジョリオン）

「西洋から見た日本映画の宗教性」

レスポンデント：櫻井義秀

井上　では、第３セッションを始めたいと思います。以前、國學院大學日本文化研究所で調査員をされていたジョリオンさんに、発題をお願いします。

ジョリオン　プリンストン大学宗教学部博士課程のジョリオン・トーマスです。今日國學院大學に戻る機会に恵まれまして、大変光栄です。今回のフォーラムは大変重要かつタイムリーなテーマについて話し合うことのできる良い機会です。出席する皆さんのお話を聞かせて頂くことで大変勉強になると思っています。

今日は西洋の宗教学者、とくに日本の宗教を専門にしている学者の立場を念頭に、日本映画と宗教文化の研究と教育についてお話ししたいと思います。私はまだそれ程多くの講義を実際に担当しているわけではありませんが、修士論文でマンガ・アニメ文化と宗教の関係について研究しました。近年アメリカの若者の間に多くのアニメ・マニアがおり、そうした学生は日本の宗教や神話についてより馴染んでいるといいます。そこから、日本の宗教について講義する学者、そして映画と宗教文化をテーマとした授業をする学者は、どうやって教室でマンガやアニメを用いることができるかと考えているわけです。私の論文はこの問題について検討するものでした。

概括的に言えば、娯楽映画を通して日本の宗教を教えることは大変難しいと思います。学生の注意を引くために、複雑な宗教概念をわかりやすく説明するために映画はふさわしい教材であるように見えるに違いありません。しかし、やや新しい教材として、映画の使用法は未だにはっきりとしていません。教員が特定のシーンやテーマに学生の注意を向けない場合、かえって変な宗教理解が生じる可能性が高いです。別の角度から見れば、映画と宗教文化を考えるときに、そもそも「宗教」という単語が何をさしているかという質問

に答えなくてはならないでしょう。それからこれらの問題を解決するためにいくつかの点に触れたいと思います。

まず、従来の映画における宗教、あるいは宗教映画研究を見ることで、宗教学や神学がいかに教義を重視してきたかについてお話したいです。それから、由緒正しい宗教の教義を重視してきたこの学問が、観衆、観客の立場と受け止め方をどのように把握することができるか、そして観衆の偏見が映画内容の解釈にどの様な影響を及ぼしているのかについて考えてみたいと思います。つまり、いわゆる受容理論（audience reception theory）とカルチュラル・スタディーズ的な方法論の重要性を強調したいです。これらを従来の研究に加えることで、新たな総合的アプローチが可能になるでしょう。その上で、最新の研究を積極的に教育の場に出していくことの必要性についてお話しします。最後に西洋の教育の場においてどうやって映画を利用できるか、また日本人をはじめとして他国の研究者との国際的協力がどのように可能か考えたいと思います。

『映画で学ぶ現代宗教』やこのフォーラムのように、近年映画と宗教の問題が取り上げられるようになってきました。西洋では、10 年以上の歴史を持つオンライン学術雑誌、*The Journal of Religion and Film* をはじめとして、数冊の本が宗教学、神学の立場から出版されています。90年代の半ばに、宗教学と映画学がお互いを無視していたことは、ジョール・マーティン（Joel Martin）が嘆いたとおりですが、それ以来アメリカ宗教学会(American Academy of Religion, AAR)の大会では必ずといって良いほど宗教と映画についての研究が発表されています。この 10 年の間に宗教と大衆文化、特に宗教と映画についての研究は大きな進展を見せました。しかし、つい最近までこれはハリウッド映画における宗教、特にキリスト教を中心に行われてきました。英語圏において、映画と宗教というテーマは、やはり映画とキリスト教というテーマと強く結びついております。

こうした従来の研究は、神話学的方向と神学的方向に大きく分かれています。後者では、基本的に伝統的な既成宗教に映画のテーマをつなげようとします。おそらくこれは宗教学や神学の当事者たちが、自分たちの知識を映画評論にもたらそうとした結果です。よって *The Journal of Religion and Film* などの学術雑誌では、さまざまな映画の宗教性が分析されています。このような研究はキリスト教に限られてはいないものの、おもにキリスト教の活力を示そうとし、多くは現代人が直面する信念的な危機など、神学的な問題に映画を媒介として回答しようとします。

これに対して、いわゆる神話学的なアプローチもあります。ここでは表面的には宗教というテーマを特にとり扱っていないような映画の中にも、宗教らしき登場人物や普遍的な神話内容を指摘します。ヒーローが救世主的な役割であること、またはストーリーが世界の終末をクライマックスとすることなど、宗教学者は虚構の世界と宗教概念をつなげよう

としています。例えば、『マトリックス』(The Matrix)の主役ネオはイエスだとか、そのストーリーが全体的に仏教の教義に基づくものだとか似ているだとか、こういうふうに説明されています。ちなみに、宗教としての映画（Film as Religion）という分析概念もありますが、これは神話学的観点に近いと私は思っています。

宗教学者と一般人の宗教理解がかなり相違するといわざるをえないのです。もちろん宗教学のレーゾンデートルは、宗教に関する知識を社会に提供するというものですが、伝統的な宗教史と教義だけではなく、一般人の日常に登場する宗教に対してもそうしなければならないと思います。しかし、宗教学者は、映画が媒介する宗教の歴史と教義に集中するきらいがあります。聖人や教祖の伝記とそれに酷似する主人公と、神話の再現など、「本当の」、あるいは隠れた宗教を虚構の作品に発見することが多いでしょう。神学的アプローチにせよ、神話学的アプローチにせよ、消極的な観衆が想定されています。つまり、受け手は無意識のレベルで宗教概念と接し、それで現代社会に伝統的な宗教意識が保たれていると判断されています。

また、どちらも映画をテキストとして、――つまり聖典と同様に――解読しています。しかし、実際に映画というものは読むというより見るメディアです。しかも、受け手は宗教にとらわれない可能性もありますし、宗教情報に興味があっても、それは正式な教義に限られたものではありません。映画の内容が宗教と何らかのつながりがあっても、芸術の一つの側面に過ぎないと決め付けることもあります。映画で学ぶ宗教、あるいは宗教文化を伝える映画について考える際に、この立場のずれを絶えず念頭に入れておかねばならないでしょう。

最後にもう一つ見失われがちな点として、製作者側と消費者側の相違点というものがあります。従来の研究では監督論の影響がはかりしれません。監督の才能やイデオロギーを重視し、監督が伝えようとするメッセージに重きを置こうとします。しかし、監督は必ずしも伝統的な宗教に詳しくないし、教義に中立的な態度をとっているとも限りません。宗教情報を使いながら恣意的に変えることもあるでしょう。あるいは、表面的に宗教的な映像を使用するからといって、宗教を積極的に解釈しているわけではありません。例えば、アニメの名監督宮崎駿は宗教を忌み嫌いますが、ある学者はあえてその態度を無視し、宮崎アニメの宗教性について論じています。

では、このさまざまな問題をどうやって解決することができるでしょうか。近年数人の学者がカルチュラル・スタディーズ的な方法を宗教映画学にもたらす必要性を強調しました。つまり、映画そのものに焦点を当てるだけではなく、その周辺に存在する行為、言説、物質的な文化をも研究しなければならないといっています。近年アメリカの宗教学者の間に、「日常宗教」や「生きた宗教」といった概念がはやっていますが、敢えて言えばこれ

はカルチュラル・スタディーズの影響を受けたものといえるでしょう。宗教活動は宗教施設の中だけで行われているものではないし、聖職者が宗教を独占しているわけでもありません。よって、一般人がどのように宗教と接し、個人レベルでどのように日常生活に宗教の教えや儀式を取り込んでいるのかを追求する必要が論じられています。方法論的に一番効果的なアプローチは参与観察とエスノグラフィーになるでしょう。

また、最近ある学者は受容理論の重要性を指摘しています。映画観衆が積極的にメディアを消費しながら映画を再解釈し、その中から新しい意味合いを見出します。観衆は監督の想定した観衆ではありませんし、監督が伝えたいメッセージが受容されるメッセージとは限りません。この受容理論を研究に持ち込むことによって、またエスノグラフィーの必要性が実感されるでしょう。つまり、一般人はどうやって日常生活の中で宗教概念と接するか、どのように、どの場面で祈りなどの宗教的な行為を行うのかを知る必要があるでしょう。

その一つの側面として、特定の映画を分析するときに、評論家の批評、俳優との面接、監督の解説に加えて、ネット上のファンのブログや掲示板の言説、映画館の前に並んでいる観衆の意見なども追求しなければなりません。教育の場では、宿題としてさまざまな映画理解を集めて分析するよう求めることは有意義でしょう。これによって単なるテキストとして読む映画より一歩先に踏み出し、観衆の受容もある程度把握できます。もちろんこれらのアプローチを使いながら、映画が宣伝する伝統的な文化情報も無視できませんし、監督の意思も見落としてはなりません。

従来、宗教と映画は別々に見られてきましたが、宗教と映画ははっきりと分かれているものでしょうか。宗教団体と映画は共に観衆、聴衆の興味を引こうとすること、宗教と映画は共に想像力に頼ること、そして宗教と映画は共に儀式の場として働くことを強調したいと思います。これらを包括的に宗教映画文化と名づけましょう。文化という単語を宗教映画に付け加えると、映画はテキストだけではないこと、宗教は経典と教義のみから成り立つのではないということを意味し、その周辺で行われている行為、その当事者の態度、そしてそのメッセージの伝え方と受け入れ方などを視野に入れることができます。

以下、宗教と映画が共有する点について３つほど取り上げたいと思います。まず、宗教は個人のレベルでは成立しません。実在する集団か想像された集団を前提に成り立つものです。近年盛んに研究されているスピリチュアリティも、個人化された擬似宗教であるといわれていますが、基本的に宗教と同様にスピリチュアリティも聴衆や消費者というコミュニティの存在を想定します。個人のレベルで消費しても、ある程度聴衆の一部であるという意識はあるでしょう。映画も同様に、一人で見ても、ある程度自分が観衆の一人であるという意識があるはずです。だから、両方は実際に集う団体、想定された観衆、聴衆と

いう多数のコミュニティが存在しています。

また、神だの、天国だの、宗教は客観的に、実証的に証明できない存在を前提にします。同様に、映画は仮定した世界を描写し、架空の登場人物を登場させる際に、実際に存在するものであるかのように描きます。虚構の世界を楽しむことは、一時的に信じ込むことであるといわれていますが、一時的であっても、絶え間なくであっても、宗教という虚構が提供する人物、世界、概念を信じることは想像力に由来するでしょう。よって、宗教と映画を考える際、この共通点を無視できません。もちろん私の考えでは、信仰が想像力に由来するというのは軽蔑的な発想ではなく、逆に信仰の知的、情操的な側面を把握する方法に過ぎないのです。

最後に、宗教の一つの特色として儀式がありますが、映画を見ることは儀式化されることもあり、映画で行われている儀式が現実世界で真似されていることもあります。儀式を通して、架空の登場人物と接しようとする人もいるようです。宗教と映画を教えるときに、宗教は伝統的な由緒正しい宗教に限らず、映画文化が生み出す宗教とそれが宗教に類似したものであるということに目を配らざるをえないでしょう。

これまでテキストとしての映画だけではなく、教義としての宗教だけでもない宗教映画文化を提示してきましたが、では、実際に研究・教育でこの概念がどうやって活用できるでしょうか。神学・神話学的アプローチをベースに、監督論や受容理論を付け加え、同時に作成者側の恣意的な宗教描写と受け手の積極的な受け入れを研究し、教室の中でこの総合的なアプローチを学生に紹介していく必要性があると私は思っております。そこで、宗教映画文化の研究法と教育法とより実現しやすいものにするため、根本的な教育法に言及してから一種の分類の枠組みを提供したいです。これらのカテゴリーの使用によって、宗教映画文化の理解が深まると私は思っています。

まず、教員はなぜある映画を選び、その映画を通して何について教えるかという質問に前もって答えられなければなりません。長編の映画を上映するより、その中からいくつかのクリップを採取することで十分かもしれません。あるいは、ある映画を一回上映して、学生に宗教らしいものを見つけさせ、その後に適切な読み物を配ってから改めて上映することはより勉強になると思います。例えば、今日ビュテル先生がお話になる『平成狸合戦ぽんぽこ』は実に宗教情報に富んでいますが、おそらく一回だけで学生にはその全てに行き着くことはできないでしょう。説話や妖怪談を読んでからもう一回見ると、映画の内容理解が深まるはずです。また、娯楽映画でも、ドキュメンタリーでも、背景の情報を学生に与える必要はとても重要です。学生はドキュメンタリーを客観的な作品とみなすきらいがありますが、実はドキュメンタリー監督も娯楽映画監督も、恣意的に特定の宗教描写を選びます。『A』を作った森達也は、おそらく外国の観衆を想定していたわけではないの

で、上映するときにはアメリカの学生にオウム真理教の最低限の情報を与えることが不可欠です。

このような背景知識を与えると同様に、映画の特殊性について考えさせる必要がありましょう。つまり、映画を単なる媒体として扱うのではなく、特殊な技術を持つだけに、特殊な反応を呼び起こすメディアとしてみなすべきです。そのため、教育の場面では特定な映画の描写手法について言及するかたわら、学生と映画技術について話す必要があるに違いありません。監督にとっては、観衆の視野を矮小、あるいは拡大することでその注意を引くことが重要です。また、ドキュメンタリー映画、ホラー映画、冒険映画などの宗教描写はかなり異なります。サウンドトラックの役割もはかりしれないものですし、近年コンピューターによって作られた特撮効果も映画の現実性に貢献できます。また、特にアニメの場合、内面的な夢や妄想、心の感情、神秘体験などを映像と音の組み合わせによって描写できます。あるときに言葉で言い表せない体験も映像で描写できます。例として、『パプリカ』という映画の登場人物の夢はたくみに映像化されています（映像）。長かったと思いますが、アニメの特撮効果を示すのに特定のものです。

映画技術だけではなく、映画鑑賞の特殊性について話す必要がありましょう。映画を見るということは身体的な体験です。映画を鑑賞するという体験は一時的ではなく、感情的でもあり、質が高ければ情操的でもあります。映画館やテレビの前で架空の世界に入り込み、映像、音、サウンドトラック、想像された匂い、感触など観衆が登場人物の経験をわがことのように感じている事実を見落としてはなりません。だから、観衆である当事者はどうやって映画の世界を経験し、なぜある映画に入り込み、別のものに入り込まないかという質問も重要です。ようするに、宗教そのものを話す前に、映画そのものの特殊性を丁寧に追求することが不可欠でしょう。

でも、宗教とは何かという質問にも答えなければなりません。この難解なものはすぐに解決できませんが、最低限の待遇はかかせないでしょう。宗教とすれば、既成宗教を思い浮かぶかもしれませんが、台頭する宗教を視野に入れる必要性もあると思います。もちろん、オウムや９．１１以降、かなり否定的な宗教イメージがあることも考えられます。また、とくにアメリカの場合、特定の宗教にコミットしている学生には日本の宗教は偶像崇拝にしか写らないかもしれません。逆に、西洋では日本の宗教を美化する傾向もあります。よって、学生は自分の世界観と他者の世界観と宗教イメージのずれを十分省みる必要もありましょう。

映画と宗教の関係は一方的ではないし、当事者の目的の観点もさまざまです。だから教育場面ではきちんとした分析カテゴリーがものをいうのです。以上の準備をしたうえで、美的な宗教描写をする映画、また、教訓的な映画、そして情操的な映画というカテゴリー

を応用するとすれば、この複雑なかかわりをより深く追求できると私は思います。

第一の種類として、宗教的なイメージ・概念が映画の表面に現れ、そのストーリーに付随した役割を果たすことを美的・表面的宗教描写と名づけます。例えば、『鉄コン筋クリート』のこの場面では、宝神社が現れますが、主に背景として現れます。同時にシロという登場人物は神というものに言及しますが、おそらくシロのいう神様は、宝神社に鎮座する神とは違うでしょう。シロがいう神様というのはどちらかといえば、一神教的な創造神ですが、日本の神社で祀られている神々はそうではないといえましょう（映像）。背景にある宝神社とセリフの並列は妙な神道理解を生み出すかもしれませんが、原作の漫画家松本大洋、そして監督マイケル・アリアスは、宗教そのものについて特にメッセージを伝えようとしているとは思えません。

第2の種類として、教訓的なものがあります。さまざまな宗教団体が映画を作成しますが、いわゆる新新宗教は特に熱心に作っているようです。例えば、幸福の科学は大川隆法の原作をアニメ化し、映画を通して団体のメッセージをより多くの人々に宣伝しようとしています。2006年の『永遠の法』はその一つですが、面白いことにＤＶＤには映画の台本が付け加えられました。観衆が登場人物と共に多数の次元を経験し、その事実に対する知識を深めることができます（映像）。この映画はアニメ技術からすればかなり質の高いものですが、内容は大変説教めいたもので、幸福の科学の信奉者が増えたかどうかはやや疑わしいです。しかし、この作品を見た人は少なくとも幸福の科学の世界観と接し、それで日常生活に最低限の潜在意識のレベルに、あるいは短期的にその世界観と自分たちの世界観の相違点を考えざるをえないでしょう。（ちなみにこの音使いは大変興味があります。また質疑応答のときにその響きの使い方について少し話したいと思います。）

最後に、ある映画は教訓的側面と美的な側面をたくみに並列し、それで観衆の知的、情熱的好奇心を引き出すことに成功します。このような現象を把握するためには、学者の個人的な読み方は十分ではないでしょう。教義にとらわれる宗教学、神学ではおそらくこのような情操的なものをテキストでしか読まないので、観衆の反応に十分な注意を払っていません。そこで、エスノグラフィーの方法がものをいうのです。実際に映画館の前でアンケート調査をしなくても現代の情報媒体を通してある程度調査をすることができます。例えば、ミクシィのようなＳＮＳを利用して特定の映画やそのファンの会話や内容解釈が垣間見えます。また、ファンたちが集う場所に赴き、その儀式化された鑑賞、コスプレなどの行為が架空の登場人物を現実化していることも観察できます。

私自身はこのような研究をしたことがあります。2年ほど前に出版された論文では、宮崎駿のファンがネット上の掲示板でどのようなネット解釈をしていたかについて研究しました。面白いことに、内容について書いてあるわけではなく、そのストーリーのモラルを

自分たちの生き方に応用し、映画の中で行われている儀式を現実に真似し、あるいは『もののけ姫』における「シシ神の森」のインスピレーションのモデルとなる屋久島に赴き、実際に木霊とであった人までいました。

その後、宮崎アニメのモラルは本当に現実に応用されるかというものをインタビューで確認しようとしましたが、例えば、『風の谷のナウシカ』を何回も見た 20 代女性と話したところ、この人はナウシカという女性を模範として生きていることが判明しました。そして、ナウシカと同様に、仕事として環境保護運動に参加したいということでした。もう一人の女性はキリスト教徒でしたが、どちらかといえばナウシカの生き方が彼女の手本となっていました。このようなエスノグラフィーの調査の方法では、テキストとしての映画や監督論としての映画の視野を拡大し、観衆の受容もある程度把握できます。

映画は博物館ではありません。絶滅した宗教の化石化した痕跡を見る場として捉えるだけでは十分ではないでしょう。かえって映画には現代の宗教の変わりつつある宗教概念、宗教伝統、そして宗教儀式が見えるからこそ映画文化には生きた宗教を見ることができます。ただしそれは必ずしも既成宗教の伝統と一致するわけではありません。よって、教室の中で伝統的な宗教教義のみに集中すれば、現代の映画文化に台頭している宗教文化を見落とす可能性が高いでしょう。

目を西洋に向ければ、研究法と教育法はさまざまですが、現在アメリカの宗教学教室では、日本映画を活用しようとしている学者の数は増えているに違いありません。おそらくこれは主にアニメ文化の普及によると私は思っていますが、未だにしっかりとしたアニメ研究はほとんどありません。英語圏では私の知っている限り、今まで書かれた論文は狭い神学的アプローチを取り、あるいは神話学的アプローチ、たまに心理学的アプローチをとっています。もちろんこれらは悪くはありませんが、以上の問題点を視野に入れますと、もはやこの読み方では十分ではないでしょう。

実際に日本の宗教について教えている方々は、より豊かな研究を待っています。例えば、現代日本の宗教を専門にしているマーク・ロウ（Mark Rowe）先生は、カナダのマクマスター大学（McMaster University）で、日本宗教と伝統文化が表現された映画コレクションを作り、ネット上で提供していますが、まだ広く使われているとはいえませんし、著作権の問題もあるらしいです。最近ロウ先生と話したところ、そのプロジェクトは停滞しているということでした。

また、プリンストン大学の教授、アメリカ宗教学会の元会長であるジェフリー・スタウト（Jeffrey Stout）先生は、宗教思想と映画の授業を長年行っていますが、スタウト先生もよく日本の映画を使っているものの、授業で使えるような質の高い研究の欠如を嘆いています。この状況から見ると、今後神学・神話学的研究の視野を拡大し、宗教文化研究を

行うべきでしょう。北米の宗教研究者がきちんとした日本の映画研究を求めているのは事実ですし、ヨーロッパでも同様な欲求はあるはずです。この国際的な研究を念頭に、今後ＩＡＨＲやＡＡＲのような大規模な宗教学会では宗教映画文化の研究の発表とその情報交換が望ましいと思われます。そして、あらゆる宗教映画研究の翻訳も必要でしょう。日本人によって行われた映画解読が英語など他の言語に翻訳され、西洋人によって行われた宗教映画研究の方法論的な議論が和訳される必要もありましょう。アメリカの学会を代表するような気持ちで、こうしたことについてぜひ皆様のご協力を願う次第です。

井上　どうもありがとうございました。それでは櫻井先生にコメントをお願いします。

櫻井　櫻井でございます。今ジョリオンさんがクリップとして紹介してくれたアニメですけれども、私が見たことがあるのは『風の谷のナウシカ』でして、大学生の頃になるでしょうか。それからオウムの『Ａ』、『Ａ２』だけですね。そういう意味では、私に映画と宗教文化の議論に関してコメンテーターとしての資格があるかどうかはわからないのですけれども、まずは、私なりにジョリオンさんが発表の中で言おうとしていたことを最初にまとめさせていただきます。そのなかでジョリオンさんが採用したいという新しい手法を、自分なりにこういうことではなかったのかということを指摘させていただきたいと思います。

ジョリオンさんの研究のアプローチですけれども、映画の中身をテキストと考えますと、まずテキストを経典を読み取くように神学として作者の製作意図、神の意図とは何なのかという形で作り手の意図を明らかにするというタイプの研究があり、次にこの経典にどのような論理構成が隠されているのかという形でテキストを神話として自由に解釈するというアプローチもあるということです。しかし、それだけでは不十分で、映画を見た人にどのように受け取られたのかというそこまで含めた映画論といいますか、宗教の表象という問題も考えなくてはいけないという３点目を強く指摘されたというふうに考えております。それで、いわば経典で述べられているようないろんな宗教的な規律などが信者、具体的には教団の信者の方々のどういうような信仰実践につながっているのか、あるいは経典化されていないが宗教の日常生活に溶け込んでいる宗教文化的な実践につながっているのかという、人類学でいうところの実践宗教に非常に近い見方をしているのではないかと考えました。そこの分野に関しては、エスノグラフィー的な研究手法を使ったほうがいいのではないかとこういう話だったわけです。

そして、最後のほうで映画を使う際に３つの分類というのが可能ではないかということでした。第一は宗教を一種の風景として使っているということ。これは日常の中に溶け込

んでいる宗教、鳥居とかそういうものであります。リサーチの方法としては、これは見ればわかるということでありますけれども、そこに教育者が適宜解説を付け加えていくということだと思います。

2 番目としては教説としての宗教が表れるような映画というものがある。これは幸福の科学が作った『永遠の法』を例に出されましたけれども、それを見た一般の方がどの程度影響を受けたかというのはわからないが、そういうものを見ていく必要があるのではないかという話でした。

3 番目に出されたのは、情操的な要素を持っている、宗教とは直接的にはつながっていないけれども、機能としては宗教に近いようなものを提示している映画があるのではないかということです。機能としての宗教といってよいのかもしれません。そこで宮崎映画を指摘されたわけですが、3 番目は見た人達の反応、オーディエンスの声をいろいろな形で拾っていくことが可能であろうということですね。ウェブサイトに表現される観た人の感想でしょうか。

私は、こうした素材として『A』と『A２』という、森達也監督の作ったドキュメンタリー作品がありますが、これに関してオーディエンスがどういう反応をしたかということを若干ご紹介したいと思います。『A』は 1997 年に作られましたものでありまして、当時のオウム真理教の広報副部長という立場にあった荒木浩さんという方の映像を中心に教団に対して公安警察がどうアプローチしてくるのか、あるいはマスコミがどういうふうに過剰なオウム像を描こうとしているのか、という内容でありました。

『A２』は 2001 年に作られたものでありますけれども、そこでは群馬県藤岡市の事例などを交えながら、住民とオウム真理教信者の対立をメディアでは盛んに放映されているのだけれども、そこには会話というものもあるし、若干の交流というのもあるんだということが描かれていたと思います。実際、当時、『A』、『A２』を私が大学院生に見せたところ非常に好評だったんですね。要するに、これまでメディアではカルト問題、オウムバッシング一辺倒だったわけでして、そういう中にあって実はオウム真理教の中にもこういう側面がある、善と悪の二元論では割り切れないということを描いてくれたということで、ある種拍手喝采のところがあったと思うわけです。

この映画はメディアの中でも好評を持って受け入れられたわけですけれども、オウム報道、カルト問題のディスコースと、実態との落差を指摘し、こういう教団の多面性（多声性）を描くことに非常に意味があったということでしょう。これに対して、いろんなオーディエンスがいるわけですけれども、例えば「オウム真理教家族の会」の代表が永岡さんという方ですが、息子さんがオウムに入られて後に脱会して、息子さんとこの方でオウムに対して反対運動をしていたんですね。結果的に、永岡さんはオウムから毒ガス攻撃を受

けまして一時期は重態に陥ったにもかかわらず、回復されてからも反対運動を今でもされている方です。

永岡さんと会の人達が、森監督に対して抗議文書を出しました。内容は映像の中に荒木さんも含めて本人の家族、教祖、教団内の子供たちというのが実像で出ている。これが記録として残っていると、将来脱会に向けて彼らが動き出したときに障害になるのではないかという見解です。もう一点は、オウム信者を普通の人達として描こうとするあまり、地下鉄サリン事件以前にもなされたさまざまな教団犯罪についてあまり描かれていない。ですから、教団犯罪についての知識を持たない人達が、『A』を見てオウムというのはこうなんだと思われるとまずいのではないかという見解ですね。これに対して森監督は答えておりません。

もう一人のオーディエンス、これは佐川一政さんというフランスにおいて女性を殺害後、その人肉を食べたと自供したのですが、心神喪失、不起訴、病院へ入院となって帰国し、その後小説を書いた人です。この人が「凶悪犯罪に群がる進歩的文化人の本音とは」という文章を、月刊『サイゾー』というところに書いております。要は自分のところにいろいろな文化人がアプローチしてきて自分のやったことを聞きたがったという話ですね。たまたま森さんが佐川さんのところに訪れてドキュメンタリーの若干の内輪の話をされたと。『A』の中に出てくる荒木さんが実はいろんなことを言っていて、自分のオウム信仰として、教祖からいろいろな指令が出されたときにそれがどういうものであってもやるんだということを語ったらしいのですが、その部分を森監督は使わなかったという。なぜかというと、自分はオウムを普通の人の集まりとして描きたかったという制作意図があったからだと。

もちろん、ドキュメンタリーといえどもそこには制作者の意図があって当然ですけれども、こういったオーディエンスからのクレームを入れて見ていかないと、『A』のようなものは教団のどこの側面を描きたかったのかということが非常にわかりにくいのではないかと思います。あるいは、住民との対話が成立したという藤岡の例ですけれども、これは私も若干調査しまして分かったことですが、住民との交流の場面というのはオウムの信者がそこを立ち去るのが決まっていた時点での話ですね。ですから信者の人がここに永住するわけではないと知っていて、数ヶ月対面状況にあって個人的な関係があった信者と住民の人達は会話をした。そこを映像として捉えたというわけです。

この映画の効用はいろいろあります。世田谷区千歳烏山のマンションにオウム（アーレフ）信者が居住していたわけですが、その人達とマンション住人の深刻な対立がずっと続いてきているわけです。そこに『Ａ２』上映会、アーレフとの対話集会という企画を持ち込んだ人達がいます。つまり、いつまでも日本社会というのはオウム真理教、カルト教団

と対立するだけではなくて、共生というのを目指していかなくてはならないんだという考え方を持たれて、『Ａ２』を媒介として話し合いの場を作ろうとしたんですね。しかしこれは住人たちの拒絶するところになりました。これを持ち込んだ人と名前を貸した人（参加するつもりであった人）は制作者側の安岡さん、宮台真司さん、河野義行さん、鈴木邦夫さんであります。

私がご紹介したのは『A』、『Ａ２』に批判的なオーディエンスと、これに対して非常に好意的なオーディエンスの方です。結局、『A』、『Ａ２』、宗教が描かれたドキュメンタリーをめぐってその後のいろいろな社会的な実践というのが生まれてくるわけですね。そういうところまで含めて『A』、『Ａ２』を学生に見せ、解説するならば『A』、『Ａ２』の制作者側の意図を相対化させることができると思うのですけれども、実際はなかなか難しいのではないか。背景的な問題含めてこのようなドキュメンタリーをうたった映像作品の撮影されるコンテキストや活用のコンテキストなどを解説することは大変だと思います。

最後になりますけれども、宗教が描かれた映画を使うということは非常に興味深いことでありますし、学生への関心をひきつけるということで私はやりたいところではありますが、作られた脈絡、背景的なことをわかっていないと、安易に使うことができないのではないかということを感じました。そういう意味において、ジョリオンさんが提示されたオーディエンスがどういう反応を示したのかという事実的なことを拾った上で、こういう映画があったと学生に提示したほうがいいのではないかと思いました。以上です。

井上　ありがとうございました。時間が厳しくなってしまいましたので、質疑応答は後にいたします。先ほども少し話題になりましたが、映画の中でもドキュメンタリーというのは少し厄介になりそうです。フィクションであればやさしいというわけではないのですが、ドキュメンタリーと称すると、事実を反映していると思いがちなので、問題がより複雑になるということだと思います。この点も後ほど討議できればと思います。個人的に思いますのは、であるからこそ、これからは個人の力でやろうとしてもなかなか難しい。国外を含め、教員の側のネットーワークを形成することで、櫻井さんの出されたような情報を共有するということが求められるのかなと思いました。どうもありがとうございました。